
ようこそ、私達の街へ

ALFRED

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

よつこじや、私達の街へ

【Zコード】

Z8840D

【作者名】

ALFRED

【あらすじ】

私達の街へよつこそ！私達の街はいろんな物があふれています。商店街は活気がありますし、学園もいくつかあつたり、そうそう、この街のお嬢様学校、美女率が高いんですよーそれと忘れてはいけない、都市伝説！この街には、いろんな伝説があるんですよ？さあ、私達の街へよつこじやー！

Tema «街』(Bad Kind)

用法容量を守り正しくお使い下さいと書かれた鎮静剤を眺め、はてこれはワタシには役に立つのだろうかと首を傾げたワタシを、ワタシ自身、阿呆だと思った。

御深市、なる街らしい、ここは。

ワタシ、ことりティアル・デュルルリアはとりあえず、人間ではない。

首が取れます。……でも幽霊ではない。

迷子です。違った、それは現状。

たぶん、デュラハンと呼ばれる妖精 うん、実はさつき立ち読みした本の受け売り。

だつて、判らないんだもの。

日本語はペラペラ流れてわからないし、でも文字は読めるのはさつき立ち読みしてわかつたから、そのうち日本語も……

駄目だ、自信ないし。

お腹が空いたから、入ったドラッグストアで、何か買おうと思つたら、通過が違うし。あ、ワタシはアイルランド出身です。

お財布……アレ？ 無い……

……あう

「……あん？」

ガラの悪そうな人登場！

日本人なのにアレです！ 金髪、さらに紅い！
ライダースーツ
紅い！ ついでに跨ったバイクまで紅い！

『なんだコイツ』

怪訝そうにワタシを見つめてギヤー！
きつと薄暗い路地に連れ込まれて、ああ～んな！」いや、「お～んな」とや、アレコントレコントいやあ～～んに！

豈せん、テニラハンだからって返り討ちにできるとかお思いでしょ
うが、ワタシにはコシユダなんとかと言つお馬やら、闇属性とか
じゃないんです！ 首が取れるのと誰かの死期をなんとなく感じる
だけ～～

わ、ワタシに触れられるとか、見つけられる時魚で……

『妖精、っぽいけど　あの刀姉ちゃんが言つてた、悪靈？
いや、死精に近いのか？……なんか泣いてるけど、おいお嬢ちゃん
んつて　俺の姿姿じゃまじいな』

な、何かしゃべって言い寄つてくれる！
あ、止めた
(明らかにそれは貴女よ)
混乱中？

『……（まあ、余計なお節介焼くのもアレだよな。困つてんかどうかなんて）』

『ああ～、カツアゲしてる～。いや～いや～いや～、せえんせ～に～いうたあ～る～』

なんか変な人増えた！

今度はおじさんだあ！ 変なおじさん、真昼間なのに着流しだ！

和風なおじさん。足裸足だあ～～～！

『げつ、大道の糞爺』

『誰が爺か。齡二十四の美男イヤオトコを前に』

『誰が二十四だ、誰が？ 僕が高校の時分に既に二十四の癖に』

なんだか不良君が、オジサンに「これが日本のカツアゲ、
と言う奴？」

『あと娘さん テクマクマヤコソ～～ で良いのかな？』

てくまくまやこん、つて何？

「……おい、爺、何しやがつた？」

「いや、お節介焼くのに困つてたんだろう？ 金網を張つてあげた
のさ」

「意味わかんねえよ！」

「お節介もちを素手で焼く氣かい？ いくら腕つ節がウリでも適材
適所があるでしょ？」

多分、ボクは君と彼女を繋ぐために出でてきただけの出場龜だよ。

さあ、熱い恋でも焼き上げたまえ」

(大正解。貴方がいないと進まないわ)

「誰が焼くか！」

「おや、銀髪には萌えないのかい？」

「燃えなーい！」

「えつと……あれ？」

なんだか、さっぱり何ですが。

いつの間にか、多少の理解が。

「あん？ 日本語喋れたのか？」

「え？ ……あれ？」

「ね？ いい金網だらう？」

「ご都合過ぎるつての！ いつたい何しやがった！」

「精靈の構成情報つて書き換えやすいんだよね〜」

「ちょっと待て！ 書きかえってなんだ！ 何でもパソコン用語とか小説用語使うんじやねえ！ 日本語で判りやすく喋りやがれ！」

「日本語つて限界があるんだよね〜」

「次は殴る

「嫌だブルギュンッツツ」

ワタシはその場から逃げ出した。

どこをどう走ったか。商店街を抜けて、公園へ まだ年端もいかない子供たちと、その母親たちが日向ぼっこに
うわあ、何か若いお母さんばっか

(というより、外人の貴女は普通に浮いて見えるから)

場違いな雰囲気に駆られつつ、私は近くのベンチに よかつた、
私以外にも一人の人が居た。

艶やかな黒髪を乱雑に伸ばした、メガネの女の子。いや、女性。たぶん若いんじゃないかな、日本人は見かけによらず、高齢な人とかいるし。基本的に若く見えてしまうの。

物静かそうで、清楚な雰囲気を漂わせ、手にした本を微細な動きもなく、緩慢に熟読している。

絵になるなあと、純粹に思った。

綺麗な人が、静寂に包まれたまま本を読みふける。時たまなる
微風が彼女を揺らし目に掛かる髪を少しだけ押さえる。

絵にするなら、『蒼の静寂』。

「……あのおねえちゃん、ニタニタして気持ち悪い」

「はう！？…………子供がこいつを見てるううう！？」

「駄目よ！ 龍太。す、すいませんねえ～」

無論、私はドギマギしながら逃げ出した。

～intermission～

仮に蒼の娘、と絵画のような娘を呼称するなら、蒼の娘の、今しがた逃げ出した銀髪の娘に対する感想は

(精靈界から墮ちた感じね。何がどんな波長で繋がったかしらないけど)

それから、小さくため息。

ただし、常人にはわからない。

娘は常に、書に依存している。内容はこうだ

「さて、肝心の助かる方法だが……『I』の話を聞いた奴は、皆すぐに死んでしまいました。助かる方法は、一つもありませんでした』とさ！」

若い車掌の鼻先に向かつて、話が終わると同時に引き金を引いた。

何度も読みなれた、100年前の米国を舞台にした、群

像劇

(そう言えれば、あの精靈 名物一人に出会つてたわね。父さんに
出会つたら、まあ助けて貰えるか)

あの精靈ことリティアルが次に出会つた人物 逃げた先と、その
先をライフワークに使用している一団を、一瞬で組み上げ

(あつち……まあ、いいわ)

と、再び意識は書物に飲み込まれていった。

~~ end ~~

少し広い公道に出て、次に体の大きい人にぶつかってしまった。
少し野太い声と、私のきやふつと言つ声が響き、私が倒れる前に

「大丈夫かい、お嬢さん」

……頬に傷のある、とてもとても往来では、「真人間です」なんて
言えそうもない、頭に「ヤ」……もう説明がいらないですねって
きやあああ！？ なんでなんでなんで！？

(彼女は知らないのである。彼女が逃げ出した区画は、学業区。

小中学校に加えて高等部が居並ぶ、特殊な区画。

中には彼らを支える商業区の一部があつたり、この街のほぼ中心
区画であることを。

さらに言つなら、このあたり一帯を仕切るのが、なぜかヤ～さん
だつたりとか）

「新田さん、その子、ガイジンさんですよ」

「んな」と呟われんでもわかつてゐる
「いや、言葉通じるんすすかね？」

「ククク、主張。

「あ？ お姉ちゃん、わかるの？ アーテエツ！」

「馬鹿言え。怯えてんだろ？！」

そりやそりや。私は一人 向こうは1 2 3……なんでもやー
せんつて群れるの？ ジャパニーズマフィア怖い〜〜〜！

「……なんだ、カツアゲか？」

戦慄。

なんか、さつきもこんな」と、あつたような

……振り向けば、警察さんがいた。えっと、白いヘルメットに、
俗に言づ、白バイ？

「おつと、これは狩ヶ原の人」

とたん、私を支えていた人が手を離し、口調を変えてこの白バイ
の人に向き直る。

「その娘は何だ？」

「知りませんよ。急にぶつかってきたんでね
周りの連れさんたちが、『やつて頷いて……アレ？ 固まつてな
い？』

「……で、そちらのお嬢さんは、それでいいのかね？」

「ククククク！」

「ケツケ、狩の旦那だつて怖がられてアデハー」
「黙つてろ、馬鹿」

隣の人、殴られてばつか。

(二) ひいう人を、殴られるために用意された人つて言ひのよ)

「……ふん、事情は署で聞きたいところだが」

「(う)おおおるわあああ！ 斬次い～！ また何かやらかしたきやあ
ああ！」

つと、旦那とか新田とか呼ばれていた大柄さんが、か細くて白い、
ついでに学生服の少女の、華麗なドロップキックにけりだされて、
車道に出た途端、タイミングよくバイクがやってきて「やつべ！？」
と、……次の瞬間、バイクが飛んだ。

！？

ドロップだけでもすごいのに、バイクがウイリー走行 前輪
を持ち上げて走るアレをしたと思うとスピードを上げて、おじさん
の体の真上を、本当にびょ～～んって、飛び越えて「バツキ
ヤロ～！ 僕でなかつたら引いてたぞ！ ボケエ！～」と叫び去つ
てしまつた。

「……うつわあ、山上の兄ちゃんの方、ごめん」

手を合わせて、バイクの方に合図。

「お、お嬢様？ お、俺には？ 俺には～！」

「おう、斬の字、カツアゲはよくねえぜ」

何ていうか、ヤクザの娘さんつて感じだった。

打ち解けた感じとか、蓮つ葉な雰囲気とか、ついでになんか清楚で整つた制服。

赤と黒のブリーツスカートに黒地に赤ラインのベスト。ネクタイだつて黒田の赤と、派手さの無い赤色が黒の高級感とあいまつて、落ち着いた、けれど弱さの無い快活さを秘めたような、すつと落ち着いた雰囲気を出していた。

「往来で暴行事件をやらかしてどうしたいんだ。荒谷の娘」「やあ～ねえ～！ 狩のおじ様あ～。……つて世間話交わせる雰囲気じゃないわね。私の学校にも回つてたし」

「だつたら少しさは自重しやがれ。あと、今のは見逃せんぞ」

「わあ～つたわあ～つた。私もちよつくりそつちに用があつたんだし。怒られるのは子供の特権だい」

「ちょ！ お嬢様！」

「私の護衛はこの逞しい、狩のおっちゃんに頼むのよ。つて～か、仕事無いんだつたら、アンタたちは別の見回りしやがれつてんだ」「待つてください。俺の方は無事です。今のは」

「うつさいよ、新田。大丈夫大丈夫、せいぜいお説教程度でしょ？ 爺さんの説教に比べたら、釈迦にポルノ、馬の耳に鼻水。

それよりおじ様、どこまで捜査は進んでる？ ウチの娘らに手を出したんだ」

「その捜査に関しては、一般人に教える義務はない」

「そうそう、んじゃ、署に行つて話を聞かせてもらいましょー！」

と、ヤクザさんのバイクからヘルメット挿つ攫つて

「あ、ノーヘルで運転しちゃ駄目だからね？」

……言つべきキャラが間違つている。

そう言つて、白バイの人はやれやれと肩を落とし、「あ、私の胸、

「そんなに小さい？」「違つワイ！」「私の前の人々は、『狩ヶ原いつか殺す！』と殺氣立っていました。

「仕方ないな。お前ら、各自自分の見回りに戻れ。バイクは俺が運ぶ

「いえ、兄貴はお車で。俺が運びますわ

「いや、俺はこっちのお嬢さんをお送りする

「あ！ それ俺が貰おうとヘブシッ！」

今頃なんか、「ああ、これが彼らなりのスキンシップなんだなあ」とて気づきました。

つて、私のことじゃないですか！

「で、お嬢ちゃん、名前聞いて……」

言い切られる前に、脱兎のごとく逃げ出しちゃいました。

何処をどう走り回ったのか、交差点が多くて、思わず路地裏に逃げ込んでしまって 嫌な予感がした。
ので、さっさと路地裏から逃げ出した。

あの会話、ただ黙つて聞いていたわけではない。何か、不穏な
気配がする。

……と、細い路地を突き抜けようとして、先ほどと同じ制服を着た二人の娘が、話しながらすれ違った際

「困りましたね」

「なあ～にい～があ～？ 先～輩？」

「この街の治安の悪さです。何だつて通り魔などとのござりさせておるのでしょつか？」

……通り魔？

一人は遠ざかつていぐ……

~~intermission~~

ある女子高生の会話。

「のさばらせておくのでしょうか？」

「あ～は～は～？ 先輩い～～～？ 『襲われたから』って怒りす
ぎ～」

「怒りはしませんが、憤りは感じます。犯罪件数が全国一位、だつ
たのは昔の話では？」

「はつはつは、ではまだ二位か三位くらいの酷さ～～～ってことで
え～」

「猫頭の貴女にしては、上手なことを言いましたね。そうですね……

最近頭角を現した、熊殺しの地上最強の白バイさん。
100人切りを成したこの地のヤクザ、新田斬次。上手い名前です
ね。

サウザンドリッパーズをたつた一人で壊滅させた、山上紅明。
嘘か真か、闇夜に現れてはゴロツキを血塗れに変える、The D
eath。

といつても、見た人が姿形がガイコツで大鎌もつていたというだけ
で、死神の「スプレとも考えられますか」

「なんか、最後はウチの『アニキ』がやあ～りそ～～～」

「『の人』は常に変態でしょ～。……の人に関しては説明不要
でしょうね」

(では、説明要の上位について、いや必要も無いか。その座右の銘
だけで、何をしたか現されているし)

「これだけ『化け物』ぞろいの街で、『犯罪を犯そつと言つ挑戦者』は初めてです」

「あ～は～は～～～～ そう言えれば、先輩も強かつたつけ？」

「剣道を嗜んでいただけです。使用したのは物差しですが」「物差しで撃退するだけでもすごいですよ～～～？」

「あなたは、逆に殺し返しそうですから止めなさい。あと、手のナ

イフをお手玉にしようどしない」

「だあ～つてえ～～～ もう、人気のない場所でしょ～～～？」

「あのねえ、『囮』の意味がなくなるでしょ～～～？」

~~ end ~~

……通り魔つて、どうしよう？

私、精霊なのに……あ、でも精霊だからいいのか。人間怖いし。

……なんで私、人間の世界にいるのよ～～～

「ママ～、あのおねえちゃん、泣いてるよ～？」

「失恋でもしたんだじょ。さつさと行きましょ

……そここの子供、母親を見習つなよ。

「あの？ どうか、しましたか？」

「救いの手を発見！ 嘴呼、人間つて優しいわ

救いの女神は綺麗な黒髪を流した、可愛らしい女の子。嘴呼、抱きしめていいかしら？

「とっても救われたって顔しますが、落ち着いてくださいね？」
少し困惑気味で、私は情けない顔をしていたのではと、近くの交差鏡で自分の顔を確認。

……私、今日泣いてばかり？

「私は、美羅。美しい羅と書きます」

「あ、わ、わた、私は リテュアル」

「リテュアル？ ……どちら方面か存じませんが、ではリテュアルさん？ どうして泣いているんですか？」

え？ ……あつ

思えば、簡単な理由で、情けなくなつてしまつた。

「ま、迷子ー」

（――）

「……それでは迷子で泣いていたのではなくて、怖かつたから泣いていたんでしょう？」

「はう、……はい」

気が付けば、さつきの公園のベンチの上。さつきのお姉さんはもういない。

今日あつた出来事を思い返したら、本当に怖い思いしかなくつて

本当、自分より年下の女の子に身の上話とか ああ、何て大人びた子なんでしょう。

「でも、貴女が出会つた人々には、多分、心当たりがありすぎます

「あ、ありすぎるんですか！」

「ええ、この街の名物さんたちですもの。

喧嘩用人型決戦兵器だとか、

ブルーアイズアルティメット白バイとか、
『らんらんる』のヤクザさん』とか」

「ら、らんらんる〜？」

「以前、何かでマクド？ か何かのバイトで道化やつて、小さな子供には好かれてるんです。その際、大喧嘩があつて それ以来ですか、100人切りとかかっこいいヤクザ呼ばれ方したのは「子供たちが、将来ヤクザになるんだ！」ってお母さんたちを困らせたりしたんですけどね？ と、少女は軽やかに微笑んで言つ。

そうだ、ということは

「あ、あのヤクザさんとお知り合い？」

「私はお話したことは無いです。ただ、ウチの兄が 鳴呼、ウチの兄も名物といえば、名物ですね。今、リナっちと買い物でもしてるのでしようが」

「お兄さんが、いるの？」

「はい。一番出合つてはいけません」

きつぱり、言われた。

「……兄は、一番、滅多に出会えないといえれば出会えないですが。もう都市伝説にされる」ˇなので」

と、少女らしからぬ、諦観というか、遠い目と書つか、茫漠とした表情のまま。

「通称、『歩く黒猫』『絶賛不幸販売中』 何やつているか知らないのですが、『人が不幸に陥っている状況下』に颯爽と現れて、解決して去つていく、ウチでも何遊んでんだかさっぱりわからない人物でして」

すつごい、見る見る頭痛のポーズに変わってしまった。

とりあえず、危険人物がまだいると

「……一見、危険な状況下で颯爽と現れて、格好よさそうですが
騙されちゃ駄目ですからね？ 静兄さんは、ぶっちゃけそういうタ
イミング、【最悪なタイミング】でないと、助けてくれないですか
ら」

「さ、最悪
」

「私たち身内では【最強最悪】って呼んでます」

「さ、最強最悪
」

「殴つても蹴つても刺しても撃つても死ないことがウリです
」
（ここ）でお嬢ちゃん、ガッツポーズ……あ、自分の行動に照れちゃ
った。

「コホン、と、ともかく 自分の家、わかります？」

「わから 」 ないと言い掛けて、自分が精霊だったのを思い出し

「だ、大丈夫、ちゃんとお家に帰れるわ。あ、あの、ありがとうね
？ 本当にありがとね？ そいじゃねええ～～～」

なんだか、私逃げてばっか

（～intermission～）

「……心配だな」

と思いつつ……

（心配ね）

「でしょう？ あれ、リナもしかして」

（うん、ずっと見てた。気づいていた）

「だったら助けて……そつか、精霊さんでも、アナタは見えないん
だっけ」

（そう ちょっと悔しい）

「そうねえ」

携帯電話 13のボタンを押して

「ねえ、兄さん」

~~~~ intermissions ~~~~

人通りが多いのを選んで、進んでいたら 突然口元を押さえられ

「う、動くんじゃねえ！ このアマがどうなつてもいいのか！」

ニット帽にグラサン、濃い体臭 アア、不審者最低……

「人質とは、迷惑この上ないですわ」

「にや／＼先輩い／＼、ごめん」

「仕方ありません。一般人まで巻き込んでしまっては 田的の遂行にはなりません」

「にや？ 逃げる？」

「……警察を呼んで、ですが 私たちが襲ったのは、内緒の方向で」

「ゴルワア！ 手前えらとつと手を上げて、地面に手をついて、動くんじやねえ！」

「……いつたい、どれをしろと言つんですけど、アナタは」

と、長い髪の女子高生と、猫みたいなさつきの女子高生が呆れたように木刀とナイフを路地奥に捨てて、手を上げたまま地面に伏せて動かなくなる。

「ケ ツハツハハ、ひひひひ。そうだ、それでいい

「何が良いんだ」

……嗚呼、何処かで聞いたドスのある声。

不審者の背筋が凍つたのが判つた。

「ちょい、子小美じょん 珠ち／＼まで どうこうことだい？」

白バイに跨った、いかつい警官と、ヤクザの娘
白バイさんはバイクのキーをさしたまま、ヤクザ娘は拳をポキボ
キならして、

「確かに、子小美？ アンタ襲つたのはコイツ？」
「ええ。今回は撃退しようっと」

「お、お前ら学生」

「狩ヶ原のおじさまですね、お話はかねがね。あとでお話いたしま
すので、今は応援を」

「もう呼んである。 で、そこのナイフ所持の男、一応、言つて
おく。ナイフを捨てて、両手を挙げる」

何この怒涛の急展開……いいいいいいいい

不審者さん、私が軽いのに気づいて、私を抱えて逃走！ 路地裏
に入り込んで、バイクを巻こうと

「警邏を、舐めるな」

！？ 追いかけてきたあああああ！！

「ニギヤアアアアアアアアアアア！」

これは、不審者の悲鳴！ だつて、サイドミラーがスガスガス削つて、
ストレス路地を爆走 あ、このまま私、ひき殺されるんじゃ
「おじさん！ あのひと轢き殺す気？」
「このまま逃がせばもっとまずい！ 止まれ！ 止まりねば殺す！」
警察が殺すとか言つてるううううう！
「あ、荒谷の娘、今の黙つとけよ」
「いいよん お小言チャラね？」

路地終了 誰かに激突！

あ、なんかデジャブ……

「なんだ、おめえ

L

「ナイス！ 新田！ そいつにヤキいれたれ！」

「一般人、手伝え！ 銃刀法違反者だ！」

「はあん?
あんたが、例の通り魔か

卷之三

私の首筋に、ナイフが
さらに触れてる触れてる
ふうえー

「ち、近づくなじめねえ！」女のぶつ殺すぞー。」

「その前に、俺が手前えをぶつ解体すぞ？」

バイブルのマフラー音

私たちの背後で、最初にあつた不良な紅い人　何だか物凄い怒り形相で、　スタートダッシュ決めようとしてません？

「おい、ライダーの紅は、弾丸より早く、バイクを突っ込みます男だ
からな　あと、手加減無いことで有名だ」

ヤクザのおじ様、知らなかつた解説有難う

「お嬢、突撃したら首すくめな 怪我なしでいたかつたらな」
ライダーマン、突つ込む気満々だあああああ！

「三國志」の「三國志」

白バイさん、助けてえええええ！

(むしろ、今助けてえ~と、叫びたいのは、通り魔さんじゃないかな。残念ね)

交差点 前門にはライダーさんに、後門にはヤクザさん
隣からは女子高生と、白バイさん

ねえ、犯人さん？ 諦めてくれない？

「…………うう、うひうひ動くんじゃねえ、ぜ、ぜぜぜぜ全員、腹ばいになつてしまがめやあ！」

「断る」

……？

そ、そいつ言えば
なんか、私

【不幸】 じやない？

「紅に狩のあつちゃん、新田ちゃんに武装女学生ズ…………なんだい、運がねえな 通り魔のあつちゃん」

「あ……あへ？」

その人は 電柱の上に、突っ立っていた。

全身黒衣、手袋からブーツまで全部黒。フードの紐と胸のチャックにシルバー アクセサリーを施す以外 いや、一番おかしいのは、

顔

目元に、鉢巻を巻いている。これも黒い鉢巻で、素性は伺えないが

□元は、凶悪に笑っていた。

「て、手前え！ 静聖夜！」

「聖夜の旦那！」

「チイ、またろくでもねえやつがしゃり出やがって！」

お前の出番じゃねえ！」

最強を詠われた三人が、いぞつて叫び 黒衣の怪人は電柱から、軽く飛び降りて

「お姉ちゃん？ 精霊だつてこと忘れてるつしょ？」

「へ？」

……あ、そうだ

私、デュラハンだつたんだ。

拳が、どこを狙つてるか 私、首取れたつけ。

メゴリツ

私の首上をすり抜けて、怪人のパンチが、通り魔さんの顔面を貫いていた。

「ほいよつと 一般市民、みごとに犯人逮捕にご協力させていただき

「黙れ！ 連續殺人鬼！」

いやああああ！ 拳銃構えないでえええええ！

「聖夜の旦那！ まずいっすよ

ヤクザさんが下手にでてるし？ 何この怪人

「……でさあ、デュラハンレディー」

なんだか、世界が反転してゐる。

「首、自分で取ろつよ？」

……あ

~~~~~

「本当に、本当にありがとうございます」

さつきの公園。

田の前には、私の愚痴を聞いてくれた、心優しい少女と 見知らぬ黒い女の子。

ついで、さつきの怪人さんは、現在変装？ を解いて、普通の好青年に転じている。

……変身癖とは、また難儀な

「デュラハンガール？ 何か失礼なこと考えてるだろ？」

「静兄さん！ ……あの、静兄さん、人の考えが表情で読めるらしいから、気をつけてくださいね？」

……すごい人だあ！？

そのすごい人に、首と体を抱えられての、救出劇は 今は別に語らなくて良いだろ？

なにせ、最強の白バイさんと、最強のライダーさんと、最強のヤクザさんとチキンレースをし、見事逃走しきったのだから。

……でも、ビルとビルを飛び越えるのは、もう止めてくださいね？ 首落とされかけて、死ぬかと思いましたから。

「で、精霊さんのはいいけど、帰り道とか、わかります？」

「現在、この市、一帯がろくでもない堀 塙 混沌の渦と化していますから、アナタみたいな、邪精も引き寄せて」「じゃ、邪精！」

黒い女子、なんか酷い！

「だつて、人の死を告げる精霊さんでしょう？ ……アナタには見えるはず、誰が、これから不幸になるのかを」

え

！？「ぶう！？」

「きやあ！汚い！」

「ああああ！ごめんなさいごめんなさい」

思わずおつゆを、優しい女の子に！って、何で！

「あ、あのお、お兄さん！」

「静聖夜。静でいいよ 聖夜はメリークリスマスだけど、そうは呼ばないで。聖夜に失礼だ」「

」このお兄さんに死期とか死の気配とか、死亡カウントダウンとか、もろもろ、盛大に、大パレード、出血大サービス中にどろどろしているんですけど！

「あつはつは、やっぱなあ～～。さすが、不幸将来体质」

「そんなレベルじゃないでしょ、兄さん。まあ、殺しても死なないのは事実ですから」

「そんなレベルじゃないですよ！ 今生きているのが不思議なくらいですよ！」

普通、これだけどうどろしていたら、精神にも異常、鬱やら自信喪失とか、心身ともに衰弱している この人はそんな気配が一切無いのに 何、この矛盾 ！

「まあ、色々やらかしてるから。心霊、神霊、推理、魔術、サスペンスにラブロマンス、あとは学園事故にエトセトラ……」

「全ての世界に精通する、万能者 それが、静聖夜。私の、最高の守護者」

と、黒い少女が、静さんの手を握り締め、私を見据える。

「どう？ 聖夜 彼女、本物のデュラハンに出会えた感想は？」

「ん？ 嘸呼、昔、アンティッド版のデュラハン、亡靈の亞種にあつたことあるけど やっぱ精霊は美人だな～って所か。あと、泣き虫で可愛いいや

えつ！？

『口説いてどうする』

娘一人から、ダブルで殴られる。……さつきまで、拳銃と刀に素手で対抗してた人とは思えない

「で、デュラハンのお姉さん？ 帰る家はある？」

黒い少女が、突然 艶やかな笑みと、秘めた黒い瞳を見せる。

……い、嫌な予感

「私たちが飼つてあげましょうか？ この静みみたいに」

「俺はペット扱いかい」

「似たようなものでしょ？」

よくわからないけど、ベッドと暖かい食べ物が手に入る場所を、手に入れました。

「首が取れるって、どんな利用価値があるかしら？」

「お願い！ それはやめてええええ！」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8840d/>

---

ようこそ、私達の街へ

2010年10月8日15時41分発行